

【書評】牧野英二『崇高の哲学 情感豊かな 理性の構築に向けて』法政大学出版局 二〇 〇七年 牧野英二著『崇高の哲学 情感豊 かな理性の構築に向けて』を読む

福島, 清紀 / Fukushima, Kiyonori

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

4

(開始ページ / Start Page)

71

(終了ページ / End Page)

74

(発行年 / Year)

2008-06

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008151>

【書評】

牧野英二『崇高の哲学 情感豊かな理性の構築に向けて』法政大学出版局 二〇〇七年

牧野英二著『崇高の哲学 情感豊かな理性の構築に向けて』を読む

福島 清紀

まず本書全体の構成を簡単に紹介しておこう。執筆意図と基本構成を述べた「序論 崇高論の今日的意義」に続く第一章のタイトルは「崇高の哲学と理性批判」、第二章は「批判哲学と崇高のイデオロギー」、第三章は「驚異と崇高——ウィトゲンシュタインとハイデガー」、第四章は「近代崇高論の地平」。以上四章から成る緻密な議論をふまえて、結論では、「情感的理性」・「情感豊かな理性」の構築のために考察されるべき論点が、手際よく整理されている。

一読して、カントの著作をはじめとする手ごわい古典的なテクストとの格闘を経てきた著者の精神的膂力を感じられた。本書の各章で論じられている諸思想と、その解釈をめぐる議論に詳しく立ち入ることは、紙幅の制約もあるので然るべき専門家に譲り、評者は門外漢の視点から、著者

が実践しつつあるフィロソフィーレン（哲学すること）の要諦と思われる事柄を中心に管見を述べて、責めを塞ぎたい。

本書の意図は、「序論」によれば、「崇高」という感情の分析を通して、「今日直面する人間、社会、自然のあり方、例えば、自己と他者、人間と自然、理性と感情の関係などを根本的に問い直すこと」にある。そしてこの問い直しへと著者を駆り立てているのは、「人類史のなかで現代という時代ほど、言語表現から生活規範や社会・政治制度、国際関係などのあらゆるレベルで凄まじい「暴力性」があらわになった時代はない」という認識である。

著者の認識を少し敷衍すれば、「個人の意志とは無関係に強力な目的合理性による『環境破壊』がグローバルな規

模で進行し、外的自然だけでなく内的自然（人間本性）が危殆に瀕している一方、「心ある人間は、自然や自然を超えた働きと思われるものに対する畏敬の念を抱き、人間の献身的な行為や感動的な出来事に対して深い崇高の感情をもつこともある」。こうした現代社会の状況を見据えながら、著者は、「多くの人々が失いつつある畏敬や崇高の感情の意義を捉え直し、彼らが直視しようとしないう現実に立ち向かい、生活の場に根ざして思索するという哲学の原点に立ち戻るために、「情感豊かな理性」を構築すること」を、「今日求められている緊急の原理的で哲学的な課題の一つ」として提示している。本書はその課題遂行のための「基礎作業」・「準備作業」である。

著者のフィロゾフィーレンの基本姿勢は、この課題設定に集約されていると言ってよい。課題というものは、それ自体で存在しているのではなく、問おうとする者の前に初めてその姿を現わす。そして、「とは何か」というソクラテス的問いの発生する場面は、日常的な現実の真只中に潜んでいる。読者は改めてそのことに思いを致すべきであろう。著者は、「生活の場に根ざして思索すること」を自らに課して、「日常生活のなかでしばしば無意識化した」「喜怒哀楽」という「基本的感情の基礎にある根本感情」としての「崇高」に焦点を絞り、この感情のもつ「複合的な構造」を解

明しようと試みる。人間の「根本感情」を何と見るかは、考察主体の賭けにも似た決断によるであろうが、著者は「崇高」を選び取った。パークの『崇高と美についてのわれわれの観念の起源の哲学的研究』やカントの『判断力批判』を深く読み込んできた著者の研究歴と、丹念に組み立てられた本書の行論に照らして考えるかぎり、件の選択もなるほどと得心がいく。

研究の独創性を競うあまり、かくかくの問題がなぜ問われなければならないのか、という根本的な問いかけを欠いた研究は多いけれども、本書はそういう諸研究とは一線を画している。過去思想と向き合うとはどういうことか、考察主体にとって《現在》とは何か、という問いが本書の底流をなしているからだ。

その点と関連するが、著者の表現行為のなかで歴史的考察と原理的考察とが統合されつつあることは、本書の優れた特徴の一つである。今日の私たちに遺産として手渡されている古典的思想は数々あるが、そのどれをとってみても、ある時代の現実社会の中で生きる人物が、同時代の現実が突きつける課題を真摯に受けとめ、自己の精髓を挙げてその課題の遂行に努めた軌跡が刻印されている。歴史的考察はそうした動態的な軌跡を描き出す。この歴史的考察が原理的考察の具体的展開を可能にし、逆に、考察主体による

原理的な問いが過去への遡源を方向づける。E・カッシーラーはナチスが台頭しつつあった一九三二年、『啓蒙主義の哲学』の序文で次のように書いた。「哲学的過去に立ち戻ることは、同時につねに哲学的自己省察と自己反省という行為でなければならない。」(中野好之訳、紀伊国屋書店、ix) 一八世紀の啓蒙主義も含めて過去の哲学・思想の今日の意義を考察する上で、まことに示唆に富む言葉である『崇高の哲学』第四章注(4)参照。

また、著者は、「プレ・モダン」と「ポスト・モダン」が密通しがちな日本の精神風土の問題性も見落としていない。このような密通回路は今なお日本社会の様々な局面に伏在しており、何らかのきっかけですぐにその露頭を見せる。

日本が『開国』に踏み切り西洋の諸思想を本格的に受容しはじめた時点で、すでに西洋では近代的な思想原理を相対化する段階に入っていたため、日本は、『近代』の受容と克服という二重の思想的課題を抱え込むこととなった。翻訳語による制約もさることながら、そうした複雑な歴史的事実は、現代日本に生きる私たちにとってまぎれもなく現実なのである。

ところで、評者の個人的な関心から言えば、「他者の排除」を生み出しうる「崇高」の「両義性」が最も興味深い問題提起であった。かく言う評者が念頭に置いているのは、

とりわけ「九月十一日の同時多発テロ」以降あらわになった問題状況である。著者によれば、「崇高」は、「人間のすばらしさ、尊敬や尊敬を自覚させる役割」と「ある種のすり替え」、「詐取」による人間の心身や存在の仕方などを隠蔽する機能」とを併せもつ。したがって、「崇高」について肯定的に語る場合には、その事柄や行為の道徳性への顧慮が不可欠」となる。評者はこの立論に決して異を唱えるわけではなく、むしろ著者の言う「道徳性への顧慮」は必須だと思う。だが、そうした「顧慮」など容赦なく吹き飛ばしてしまうような事態を前にして、今日の私たちは、「道徳性」の判断基準や内実をどう考えればよいのか。確かに、「われわれにとって勇敢で崇高な振る舞い」は、「他者(われわれ)から排除された人々や存在者」に対する「野蛮な振る舞い」に常になりうる。そしてその「野蛮」を生み出す可能性は、「崇高」の「詐取」に起因すると言えるだろう。しかし、「詐取」あるいは「排除」そのものの発生装置はいかなるものなのか。本書の問題提起に触発された一読者としては、いささか性急ながらそう問わざるをえない。殊に複数の集団ないし共同体が、それぞれのアイデンティティを追いかけてせめぎ合う場面では、政治的・経済的・宗教的等々の諸要因が複合して、正義と正義との激突、「崇高」と「崇高」との相克が幾度となく繰り広げられてきた。

《九・一一》はその最たるものだ。この亀裂を克服する手立てはあるのか、あるとすればそれはどのようにして見出すことができるのか。これは、「国民国家」の擬制性が露呈するとともに、世界各地で民族問題が噴出するに至ったことにも関わる、この上なく深刻な問題状況だと言えよう。

「崇高」という概念に賭けられているものは重い。

評者は、後塵を拝しつつ著者のこれまでの執筆活動に少なからず注目してきたが、率直に言えば、『遠近法主義の哲学 カントの共通感覚論と理性批判の間』（一九九六年）は、未踏の領域をめざす野心的な思考実験がしばしばそうであるように、書き手の強い思い入れが不可避免的に叙述の分りにくさを招く可能性があることを感じさせた。また、『カントを読む ポストモダンニズム以降の批判哲学』（二〇〇三年）では、全体を通しての平易な語り口が、著者の思索の熟成と、書くという行為における新生面の登場をはっきり印象づけたのだが、『経験論』対『合理論』という認識論的な枠組みを前提として、一七・一八世紀のイギリスの哲学と大陸の哲学との関係を総括しようとするドイツ哲学史的な捉え方の名残りが見られ、それがわずかに気がかりであった。しかし本書では、それらのことが拭い去られ、歴史感覚と原理的思考とがバランスよく結合し、密度の高い議論が展開されている。

本書の副題にも見られる「情感豊かな理性」は、著者の造語であり、単なる「感性」や「悟性」や「理性」の働きではなく、「構想力と結び合わされたこれら諸力の総合的な働き」を意味する。「これらの働きに由来する諸感情にかんする全体的把握とそれらの相互連関の総合的研究」は今後の課題であるという。現代社会のありようを広く視野に入れた著者の意図を実現するためには、「生活の場に根ざして思索する」ことに加えて、著者自身も述べているように「諸科学との横断的考察」が不可欠となろう。このように「わが知的《脱藩》への志向こそが、閉じられた学術研究に陥りがちな哲学に、文明批評としての存在意義と活力を取り戻す根本動機にもなりうるのではないか。本書での基礎作業をもとに、「情感豊かな理性の構築に向けて」なされるであろう、さらなる思考の冒険に期待したい。